

『国富論』における

《manufacturer》の語義について

高 木 正 道

I

There is one sort of labour which adds to the value of the subject upon which it is bestowed: There is another which has no such effect. The former, as it produces a value, may be called productive; the latter, unproductive labour. Thus the labour of a manufacturer adds, generally, to the value of the materials which he works upon, that of his own maintenance, and of his master's profit. The labour of a menial servant, on the contrary, adds to the value of nothing. Though the manufacturer has his wages advanced to him by his master, he, in reality, costs him no expence, the value of those wages being generally restored, together with a profit, in the improved value of the

subject upon which his labour is bestowed. But the maintenance of a mental servant never is restored.

これは、アダム・スミス『国富論』第二篇第三章「資本の蓄積について、すなわち、生産的労働と不生産的労働について」の、有名な冒頭の一節である。大内兵衛・松川七郎訳では、この箇所は次のように訳されている。

「労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる部類のものと、このような結果を全然生まない別の部類のものとがある。前者は、価値を生産するのであるから、これを生産的労働と呼び、後者はこれを不生産的労働と呼んでさしつかえない。こういうわけで、製造工の労働は、一般に、自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する。これに反して、召使の労働はどのような価値も付加しない。なるほど、製造工は、自分の賃銀を自分の親方からまえ貸ししてもらってはいるけれども、こういう賃銀の価値は、一般に、自分が労働を加えた対象の増大した価値のうちに利潤をとまって回収されるのであるから、実は主人にはなんの費用もかからない。ところが、召使の生活維持費はけっして回収されないのである。」

ここではまず「*manufacturer*」が「製造工」と訳されていることを確認しておきたい。水田洋訳と大河内一男監訳も同様に「製造工」という訳語を採用しているが、竹内謙二訳では、「物を製造する労働者」とか「製造労働者」と訳されている。<sup>(4)</sup>しかしいずれにしても、雇用労働者を意味する訳語が選ばれているという点では共通している、と見てよいであろう。

また、大内・松川訳は「*master*」という語を「親方」あるいは「主人」と訳しているのに対して、水田訳では「主人」、大河内監訳と竹内訳ではともに「雇主」という訳語が用いられている。私には、「雇主」という訳語が最も適切であるように思われる。<sup>(5)</sup>

さて、次の文章は、重農主義の学説を扱った第四篇第九章からの抜粋とそれに対応する大内・松川両氏の翻訳である。

Artificers and manufacturers, in particular, whose industry, in the common apprehensions of men, increases so much the value of the rude produce of land, are in this system represented as a class of people altogether barren and unproductive. Their labour, it is said, replaces only the stock which employs them, together with its ordinary profits. That stock consists in the materials, tools, and wages, advanced to them by their employer; and is the fund destined for their employment and maintenance. Its profits are the fund destined for the maintenance of their employer. Their employer, as he advances to them the stock of materials, tools and wages necessary for their employment, so he advances to himself what is necessary for his own maintenance, and this maintenance he generally proportions to the profit which he expects to make by the price of their work. Unless its price repays to him the maintenance which he advances to himself, as well as the materials, tools and wages which he advances to his workmen, it evidently does not repay to him the whole expence which he lays out upon it. The profits of manufacturing stock, therefore, are not, like the rent of land, a neat produce which remains after compleatly repaying the whole expence which must be laid out in order to obtain them. The stock of the farmer yields him a profit as well as that of the master manufacturer; and it yields a rent likewise to another person, which that of the master manufacturer does not. The expence, therefore, laid out in employing and maintaining artificers and manufacturers, does no more than continue, if one may say so, the existence of its own value, and does not produce any new value. It is therefore altogether a barren and unproductive expence.

The expence, on the contrary, laid out in employing farmers and country labourers, over and above continuing the existence of its own value, produces a new value, the rent of the landlord. It is therefore a productive expence.

「とくに工匠および製造業者は、世人のふつうの理解ではその勤労が土地の粗生産物の価値をひじょうに増加させることになっているけれども、この体系においてはまったく不妊的で不生産的な階級の人々だ、と主張されている。かれらの労働は、かれらを雇用する資財だけをその通常の利潤とともに回収するにすぎない、と言われている。この資財は、かれらの雇主によってかれらにまゑ払いされる原料・用具および賃銀に存しており、またそれはかれらを雇用し扶養するために予定された元資である。そしてその利潤は、かれらの雇主を扶養するために予定された元資である。かれらの雇主は、かれらを雇用するために必要な原料・用具および賃銀からなる資財をかれらにまゑ払いするように、自分の生活を維持するために必要なものを自分自身にもまゑ払いするのであって、かれはこの生活維持費を、かれがかれらの所産の価格からあげられると期待する利潤にだいたい比例させるのである。この所産の価格が、かれが自分の職人たちにまゑ払いする原料・用具および賃銀はもとより、自分自身にまゑ払いする生活維持費をも払いもどさぬかぎり、この価格は明らかにかれがついやした全支出をかれに払いもどさぬことになるわけである。それゆゑ、製造業の資財の利潤は、土地の地代とは異なり、利潤をえるために支出されなければならない全支出を完全に払いもどしたあとにのこる純生産物ではない。農業者の資財は、親方製造業者のそれと同じくかれに利潤をもたらすほか、他の人にも地代をもたらすが、親方製造業者の資財はそれをもたらさない。それゆゑ、工匠や製造業者を雇用し扶養するのについやされた支出は、いわばそれ自体の価値の存在を継続させるだけであつて、新しい価値をすこしも生産しない。したがつて、それはまったく不妊的で不生産的な支出である。これに反し、農業者やいなかの労働者を雇用するのについやされた支出は、それ自体の価値の存在を継続さ

せてなおそのうえに、新しい価値、すなわち地主の地代を生産する。したがって、それは生産的な支出である。」

今度は「manufacturer」は「製造業者」と訳されている。水田<sup>(2)</sup>訳も大河内監訳も「製造業者」という訳語を充て、『誤訳』の著者竹内氏の訳も同じく「製造業者」である。

しかし私としては、この訳語は不適當であると言わざるをえない。なぜなら、「製造業者」という語は雇用する人、もしくは独立自営の人を連想させるのたいして、この場合の「manufacturer」は雇用される人であると明言されているからである。少なくとも「製造業者」という言葉の通常の語感からするかぎり、雇用労働者をイメージすることを期待するのは、到底無理であろう。それゆえ、さきの第二篇第三章におけるのと同様に、ここでも「製造工」と訳すべきである、と私は考える。また「master manufacturer」は、竹内訳以外ではすべて「親方製造業者」という訳語が充てられているけれども、これこそ、「製造業者」ないしは（竹内訳のように）「製造業主」と訳されてしかるべき用語ではなからうか。ともあれ、訳語の統一は、以下に述べるような事情からも強く要請されざるをえない。

スミスは、さきのような重農主義の学説を紹介したあとで、その誤謬を五点にわたって指摘しているが、二番目の批判点は次のようなものである（例によって、まず原文、次に大内・松川訳を提示する）。

Secondly, it seems, upon this account, altogether improper to consider artificers, manufacturers and merchants, in the same light as menial servants. The labour of menial servants does not continue the existence of the fund which maintains and employs them. Their maintenance and employment is altogether at the expence of their masters, and the work which they perform is not of a nature to repay that expence. That work consists in services which perish generally in the very instant of their performance, and does not fix or realize itself in any vendible commodity which can replace

the value of their wages and maintenance. The labour, on the contrary, of artificers, manufacturers and merchants, naturally does fix and realize itself in some such vendible commodity. It is upon this account that, in the chapter in which I treat of productive and unproductive labour, I have classed artificers, manufacturers and merchants, among the productive labourers, and menial servants among the barren or unproductive.

「第二に、以上の理由から、工匠・製造業者および商人を召使と同一視するのはまったく不適切であるように思われる。召使の労働は、かれらを扶養し雇用する元資の存在を継続させない。かれらを扶養したり雇用したりするのは、まったくかれらの主人の経費負担においてなされるのであって、かれらがおこなう仕事はこういう支出を払いもどすような性質のものではない。この仕事は、総じてかれらがおこなうまさきにその瞬間に消滅してしまうような労務に存し、かれらの賃銀や生活維持資料の価値を回収しうるような、売りさばくことのできるなんらかの商品にそれ自体を固定したりまたは実現したりするものではない。これに反し、工匠・製造業者および商人の労働は、当然このような売りさばくことのできるなんらかの商品にそれ自体を固定したり実現したりするものである。わたしが生産的および不生産的労働をとりあつかった章で、工匠・製造業者および商人を生産的労働者の部類にいれ、召使を不妊的または不生産的労働者の部類にいたれたのも、この理由にもとづくものにほかならないのである。」<sup>10)</sup>

引用文中にある「わたしが生産的および不生産的労働をとりあつかった章」とは、言うまでもなく、最初に取り上げた第二篇第三章にはかならない。したがって、ここで「製造工」以外の訳語を用いることは、読者を無用な混乱に陥れることになる。しかも、いま引用した箇所でミスは、第二篇第三章において「*manufacture*」と「工匠」と「商人」の三者を生産的労働者と規定したかのように語っているけれども、実際にかれが不生産的な召使（「家事使用人」）との対比において

論じているのは専ら『*manufacture*』についてであるという点をも考慮に入れるなら、その訳語を「製造工」に統一しないかぎり、全体の意味が通じなくなってしまうのではなからうか。にもかかわらず、その他の邦訳、すなわち水田訳<sup>18)</sup>、大河内監訳<sup>19)</sup>、竹内訳<sup>19)</sup>のいずれにおいても、「製造業者」と訳されているのは一体どうしたことであらう。

## I

前節で示されたように、スミスは、『国富論』の理論的問題を扱った重要な箇所において、『*manufacturer*』を「製造工」という意味で用いている。だがこのような用語法は、かれ独自のものののだろうか、それとも当時一般的に行われていたのだろうか。この点を調べるために、試みにサムエル・ジョンソンの『英語辞典』（一七五五年）に当たってみると、『*manufacturer*』の項には『*A workman; an artificer*』と記されているだけで、それ以上の説明はない。つまり、ジョンソンの辞典には「製造業主」ないし「製造業者」という意味は載っていないのである。

続いて、いわゆる「歴史原則」(historical principles)に基づいて編まれているOEDを引いてみると、『*Manufacturer*』の第一の意味は『*An artificer, an operative in a manufactory*』である。そして、ウィリアム・ウッドの一九九九年版『貿易の検討』(*A Survey of Trade*)からの、「国教会と宗旨を異にする連中は概して最下層の者、機械職人・製造工および手工業者である」(Those who differ from the Established Church are generally of the lowest Rank, Mechanics, Artificers and Manufacturers)という用例が最初に挙げられている。二番目の用例として載っているのは、『国富論』第一篇第十章第一節からの次のような文である。

The wages of mechanics, artificers and manufacturers should be somewhat higher than those of

common labourers.

大内・松川訳では、「機械職人・工匠および製造業者の賃銀は、ふつうの労働者たちのそれよりもいく分か高くすべきだ<sup>(17)</sup>」となっている。ここに出てくる「*manufacturer*」は、水田訳では大内・松川訳と同じく「製造業者」であるが、大河内監訳と竹内訳では共にこれを「製造工」と訳してある。後者が適訳であること、言を俟たない。ちなみに、ここで再びジョンソンの辞典を見ると、「*Mechanick*」は「*A manufacturer; a low workman*」と説明されている。

OEDには、これら以外にさらに二つの用例が採録されている。一つは、一八一二年の*The Annual Register*から——「「ノッティンガムの」貧しい製造工たちを暴動へと追いやった困窮」。(The distresses which had driven the poor manufacturers [of Nottingham] to acts of outrage)。もう一つは、マコーリの一八四九年版『イギリス史』(*The History of England*)、第一巻から——「一日に一シリングは、当時「一六八〇年に」イギリスの製造工が貰って当然と考えづけた報酬であった」A shilling a day was the pay to which the English manufacturer then [in 1680] thought himself entitled)。

以上により、「*manufacturer*」を「製造工」という意味で使用することは決して特殊スミスの用法ではなく、かれの時代のむしろ一般的な用法であったことがほぼ明らかになったと思われるが、この点をいっそう明確にするために、以下では、同時代の経済学関係の文献からそのような用例をいくつか拾い上げてみたい。

(1) ジェイムズ・ステュアートの『経済学原理』から。ステュアートは「*manufacturer*」という語を必ずしも一義的に用いているわけではないが、まず最初に紛れもなく雇用労働者としての「製造工」という意味で使っている例を挙げる<sup>(18)</sup>。

But I must observe, that when manufacturers can thus capitulate with their employers, and can insist upon an augmentation of their wages, the demand of the market must be greater than the



supply from their work. This is the circumstance which raises the price of labour. Let the demand of the market fall, the prices of labour will fall, in spite of all the reasons which ought naturally to make them rise. The workmen will then enter into a hurtful competition, and starve one another, as has been often observed. Let the demand of the market rise, manufacturers may raise their wages in proportion to the rise of the market.

「しかし私としては、製造工たちがこうしてかれらの雇用主と交渉することができ、かれらの賃金の引上げを迫ることができるときには、市場の需要のほうがかれらの仕事によって供給されるものを上回っているにちがいない、と言わざるをえない。これこそ、労働の価格を上昇させる事情なのである。市場の需要が減るとすれば、労働の価格は、それを当然にも上昇させるはずのあらゆる原因にもかかわらず、低落するであろう。そうになると、しばしば見られるように、労働者たちは競争を始めて互いに傷つけ合い、餓死してしまうであろう。市場の需要が増えるとすれば、製造工たちは市価の上昇に応じてかれらの賃金を引き上げうるにちがいない。」

Fifthly, If hands increase, after he is reduced to his physical-necessary, the whole class of the manufacturers will be forced to starve.

「第五に、かれ（『労働者 (Workman)』）がその生理的必要を充たすだけの生活を余儀なくされたあとで人手が増加するなら、製造工たちの階級全体が否応なく餓死せざるをえない破目に陥るであろう。」

ついでに、ステュアートの用語法が必ずしも「義的ではないと言ったのは、次のような例が見られるからである。」

Now the price of a manufacturer's wages is not regulated by the price of his subsistence, but by the price at which his manufacture sells in the market. Could a weaver, for example, live upon the

air, he would still sell his day's work according to the value of the manufacture produced by it, when brought to market. As long as he can prevent the effects of the competition of his neighbours, he will carry the price of his work as high as is consistent with the profits of the merchant, who buys it from him in order to bring it to market; and this he will continue to do, until the rate of the market be brought down.

「ところで、製造工の賃金の価格は、かれの生活資料の価格によってではなく、かれの製造品が市場で売られる価格によって規制される。例えば、ある織工が霞を喰って生きることができるとしても、やはりかれは、自分の一日の仕事を、その仕事によって生産された製造品が市場にもたらされたときの価値に従って売るであろう。かれが同業者たちの競争の効果を防ぐことができるかぎり、かれは自分の仕事の価格を、かれからそれを買って市場へもたらす商人の利潤と両立する限度まで高めるであろう。そして市場の相場が下落するまで、かれはそうし続けるであろう。」

ここに登場する「製造工」は、自分が生産する製造品を商人に直接販売しており、その限りにおいて雇用労働者ではありえない。むしろ、独立生産者とみなすべきであろう。むしろ、『経済学原理』には、『*Manufacturer*』の——「賃金」ではなく——「利潤」を云々している箇所もいくつかある。その例を一つ挙げれば——

Under these circumstances I conclude, that if foreign trade suffer by the high prices of commodities in our markets, the vice does not proceed from our taxes, but from our domestic luxury, which swells demand at home. Were we less luxurious, and more frugal in our management in general, all classes of the industrious, from the retailer down to the lowest manufacturer, would be satisfied with more moderate profits.

「こういう次第で、もし外国貿易が自国の市場における商品の高価格のために不振になっているなら、その元凶はわが国の税ではなく、自国で需要を増大させているわが国内の奢侈にある。われわれが生計万端においてさほど贅沢でなく、もっと質素であるならば、勤労者の全階級は、小売商から最下層の製造工にいたるまで、もっと慎しい利潤で満足するであらう。」

「最下層の製造工」が満足する「利潤」とは一体何であらうか、「利潤」が問題になっているからにはこの場合の「*manufacturer*」は「製造工」ではなくて「製造業主」ではなからうか、といった疑問が湧いてくる。だが、「利潤」が云々されているからといって、そのことだけで直ちに「*manufacturer*」を「製造業主」と判断するのは、いささか早計と思われる。というのは、ステュアートのいう「利潤」とは、決して、スミスと同じ意味での利潤——すなわち、「土地の地代」や「労働の賃金」に対応する「資本の利潤」——ではないからである。そのことは、かれの「利潤」の定義を一瞥すれば判る。曰く、「利潤、*profit*」を、そして損失、*loss*」を、私は絶対的、*positive*、相対的、*relative*ならびに複合的、*compound*なものに区別する。絶対的利潤は、なんびとの損失をも伴わない。それは労働、勤労ないしは創意の増大から生じて、公共の利益を拡大し、あるいは増大せしめるという効果を持っている。(傍点原文) だからステュアートは、「勤労による利潤」(*profits upon industry*)や「適度な利潤を求めて労働している人々」(*people who labour for moderate profits*)について語ったり、「交易が定着している国においては、いつでも販売でき、仕事の価格が規制されており、しかも一定の利潤が勤労から生まれるがゆえに、製造業は繁栄するに相違ない」と述べたりしている。要するに、かれにあっては、労働に対立するものとしての明確な資本概念が欠けているために、賃金と利潤はまだ範疇的に区別されるにいたっていないのである。しかしながら、こうした曖昧なところを残しつつも、「*manufacturer*」が「資本家」としての「雇用主」という限定された意味で使用されている例は、『経済学原理』には見当たらないように思われる。

私が注目したいのは、まさにこの点にほかならない。

(2) 『フランス紀行』のアーサー・ヤングは「*manufacturer*」という語を——多分フランス語の影響を受けて——「*ニュファクチュア所有者*」<sup>(82)</sup>という意味で使っているようであるが、『六カ月間イングランド北部巡行』(『*A Six Months' Tour through the North of England*』)における次のような用例は、疑う余地なく「製造工」を意味している<sup>(83)</sup>。

The earnings of the manufacturers are as follows, per week: The combers, 10s 6d. The spinners, women, 3s; children of ten or twelve years, 2s. The knitters, 2s 6d; children of ten or twelve years, 2s. All the work-people have constant employment if they please.

「製造工たちの稼ぎ高は以下の通り。週当り——梳毛工十シリング六ペンス。紡績工、婦人は三シリング、十ないし十二歳の子供は二シリング。編物工二シリング六ペンス、十ないし十二歳の子供は二シリング。労働者たちはすべて、その気になれば、恒常的に仕事にありつゝる。」

また次の箇所は「*master manufacturer*」が「*manufacturer*」との対比において、後者を雇う「製造業主」という意味で用いられつゝることをはっきり示している<sup>(84)</sup>。

The manufacturers themselves, as well as their families, are in such times better clothed, better fed, happier, and in easier circumstances, than when prices are low, for at such times they never worked six days in a week, numbers not five, nor even four; the idle time spent at alehouses, or at receptacles of low diversion; the remainder of their time of little value; for it is a known fact, that a man who sticks to his loom regularly, will perform his work much better, and do more of it, than any one who idles away half his time, and especially in drunkenness.

The master manufacturers of Manchester wish that prices might always be high enough to enforce a general industry; to keep the hands employed six days for a week's work; as they find that even one idle day, in the chance of its being a drunken one, damages all the other five, or, rather, the work of them.

But at the same time, they are sensible, that provisions may be too high, and that the poor may suffer in spite of the utmost industry; the line of separation is too delicate to attempt the drawing, but it is well known by every master manufacturer at Manchester, that the workmen who are industrious, rather more so than the common run of their brethren, have never been in want in the highest of the late high prices.

「製造工たちは、自分の家族ともども、そのような「食料品価格が高い」ときのほうが、価格が低いときよりも、よい衣服を着て、よい食事を取り、より幸福で、より安楽に暮している。というのは、こうした「低価格の」とときには、かれらは一週間に六日働くことは決してなく、「労働」日数は五日または四日にすら達しないこともあり、居酒屋や下等な娯楽場で怠惰な時間を過ごすからである。かれらの残りの時間はほとんど価値がない。というのは、規則的に機械にはりついている人のほうが、自分の時間の半分を特に飲んだくれて怠け暮しているどんな人よりも、自分の仕事をずっと上手にかつ多量に成し遂げるということは、周知の事実だからである。

マンチェスターの製造業主たちは、全員に勤労を余儀なくさせ、労働者を週に六日間仕事に就かせておくに十分なほど、常に物価が高いことを望んでいる。かれらの見るところでは、たとえ一日怠けるだけでも、その日が泥酔の日になるようであれば、残りの五日すべてを、あるいはむしろ、その五日間の仕事を駄目にしてしまうからである。

しかし同時にかれらは、食料品が高すぎるのかもしれない、精一杯の勉強にもかかわらず貧民は苦しんでいるのかもしれない、ということに気づいている。両者を分つ線はあまりにも微妙であるために引こうとすることもできないが、勤勉な——もっと正確にいえば、同僚の並の連中よりも勤勉な——労働者たちは、このほどの高物価の最高時においても困窮することがなかったということは、マンチェスターのあらゆる製造業主の熟知するところである。」

『六か月間イングランド北部巡行』からもう一例だけ。

Upon the whole, the manufactures of Sheffield make immense earnings. There are men employed in more laborious works, that do not earn above 6s or 7s a week, but their number is very small, in general they get from 9s to 20s a week; and the women and children are all employed in various branches, and earn very good wages, much more than by spinning wool in any part of the kingdom.

「大体において、シェフィールドの製造工たちは莫大な稼ぎ高を上げる。一週当り六シリングか七シリング以上の稼ぎにならない、もっと骨の折れる仕事に雇われている人々もいるが、その人数は極めて少ない。一般にかれらは一週当り九シリングから二〇シリングを得る。婦人と子供はみな種々の部門に雇われており、羊毛の紡績〔工〕が王国のどこにおいて稼いでいるよりもはるかに多くの、大変よい賃金を稼いでいる。」

(3) 以下に引用するのは、マラカイ・ポスルスウェイトの『商工業大辞典』(*The Universal Dictionary of Trade and Commerce*) 第四版（一七七四年）の「第一序論」(First Preliminary Discourse) からの——マルクスによって『資本論』に引用された——有名な一節の一部である。

We cannot put an end to those few observations, without noticing that trite remark in the mouth of too many; that if the industrious poor can obtain enough to maintain themselves in five days,

they will not work the whole six. Whence they infer the necessity of even the necessities of life being made dear by taxes, or any other means, to compel the working artisan and manufacturer to labour the whole six days in the week, without ceasing. I must beg leave to differ in sentiment from those great politicians, who contend for the perpetual slavery of the working people of this kingdom; they forget the vulgar adage, all work and no play. Have not the English boasted of the ingenuity and dexterity of her working artists and manufacturers which have heretofore given credit and reputation to British wares in general? What has this been owing to? To nothing more probably than the relaxation of the working people in their own way. Were they obliged to toil the year round, the whole six days in the week, in a repetition of the same work, might it not blunt their ingenuity, and render them stupid instead of alert and dexterous; and might not our workmen lose their reputation instead of maintaining it by such eternal slavery?

「われわれは、この短かい所見を結ぶにあたって、あまりにも多くの人が口にするありふれた言いぐさについて一言しないわけにはゆかない。もし勤労貧民が生活するのに十分なだけを五日で得られるとすれば、かれらはまる六日も労働しようとしないう、というのがそれである。このことからかれらは、職工や製造工に絶え間なく一週六日の労働を強制するためには、租税あるいはその他なんらかの手段によって生活必需品さえも高価にすることが必要だと結論する。失礼ながら私は、この王国の働く人々の永久的な奴隷状態を弁護するこれらの偉い政治家たちとは見解を異にする。かれらは、働くだけで遊ばないと馬鹿になるという俗諺を忘れてゐる。イギリス人は、これまで英国製品一般に信用と名声を与えてきた自国の職工や製造工たちの独創力と器用さを自慢してきたではないか。それは何のおかげであろうか。おそら

く、わが国の働く人々がかれらなりのやり方で行なう気晴らし以外のなんのおかげでもなからう。もしかれらが週にまる六日同じ仕事を繰り返して一年中こつこつ働くことを強いられるなら、それはかれらの独創力を鈍らせ、かれらを機械で器用にするよりもむしろ愚鈍にするのではなからうか。そしてわが国の労働者たちは、そのような永久的な奴隷状態によって、自分たちの名声を維持するよりもむしろ失ってしまうのではなからうか。」

ここに二度出てくる《manufaktur》を「マルクスは必ずしも《Manufakturarbeiter》<sup>(82)</sup>と独訳している。また念のため、マルクス自身の校閲になるフランス語版『資本論』に当たってみると、《ouvriers de manufactures》<sup>(83)</sup>という訳語になっている。

労働者を擁護する側に立つボスルスウェイトの引用に続いて、マルクスは、それとは正反対の立場を代表する一七七〇年刊の『商工業論』<sup>(84)</sup> (*An Essay on Trade and Commerce*) からこれもかなり長文の引用を行っているが、以下はその一部である。

That mankind in general, are naturally inclined to ease and indolence, we fatally experience to be true, from the conduct of our manufacturing populace, who do not labour, upon an average, above four days in a week, unless provisions happen to be very dear. . . . Put all the necessaries of the poor under one denomination; for instance, call them all wheat, or suppose that. . . the bushel of wheat shall cost five shillings and that he (a manufacturer) earns a shilling by his labour, he then would be obliged to work five days only in a week. If the bushel of wheat should cost but four shillings, he would be obliged to work but four days; but as wages in this kingdom are much higher in proportion to the price of necessaries . . . the manufacturer, who labours four days, has a surplus



of money to live idle with the rest of the week . . . . I hope I have said enough to make it appear that the moderate labour of six days in a week is no slavery. Our labouring people do this, and to all appearance are the happiest of all our labouring poor, but the Dutch do this in manufactures, and appear to be a very happy people.

「およそ人間というものは生来安楽と怠惰に傾くということ、これが真実であるということをおわれわれは残念ながら製造業人口の行動から経験する。かれらは、食料品が高騰するような事態が起こらなければ、平均して週に四日以上労働することはないのである。……貧民のあらゆる必需品を一つの名称で表わし、例えばそれを小麦と呼ぶことにし、一ブッシェルの小麦が五シリングで、かれ(製造工)は自分の労働によって「一日当り」五シリング稼ぐものと仮定しよう。その場合かれは、週に五日だけ働けば済むであらう。もし一ブッシェルの小麦がたったの四シリングならば、かれは四日働くだけでよいであらう。しかし、この王国の賃金は必需品の価格に比してかなり高いので、……四日労働する製造工は、一週の残りを怠けて暮せる余分な金をもつのである。……週に六日の適度な労働が決して奴隷状態ではないということをお明かにするためには、私が述べたことで十分だと思う。わが国の農業労働者はそうしており、しかもどこから見てもすべての労働貧民のなかで最も幸福なのである。しかし、オランダ人は製造業においてこのことを実行していて、非常に幸福な国民のように見える。」

この場合の《manufacturer》をマルクスは先と同様に《Manufakturarbeiter》<sup>(38)</sup>と訳している。また《labouring people》がここには《Agrikulturarbeiter》<sup>(39)</sup>と訳されている点にも注意を払っておきたい。再びフランス語版『資本論』の当該箇所を見ると、問題の《manufacturer》は、《ouvrier de manufacture》<sup>(40)</sup>、《labouring people》は《ouvriers agricoles》<sup>(41)</sup>となっている。

さてわれわれとしては、以上のようにマルクスが『*manufacturer*』を『*Manufakturarbeiter*』と独訳していることを知った以上、スミスの『国富論』に頻出する同じ語をかがどう訳しているかを調べないわけにはゆかない。マルクスがアダム・スミスの生産的労働と不生産的労働の概念規定を批判的に検討している『剰余価値学説史』第四章には、『国富論』の第二篇第三章と第四篇第九章から沢山の引用がなされているが、それらはすべて独訳されずに英語または仏語のまま引かれているため、われわれが知りたい肝心の点は一向に明らかにならない。<sup>(86)</sup>この点について確かめることのできる箇所を『資本論』のなかに捜してみると、本稿の最初に引用した『国富論』第二篇第三章の冒頭節の一部を、マルクスは次のように訳している。<sup>(86)</sup>

Ogleich der *manufacturer* (i. e. *Manufakturarbeiter*) seinen Lohn vom Meister vorgeschossen bekommt, verursacht er diesem in Wirklichkeit keine Kosten, da der Wert des Lohns zusammen mit einem Profit gewöhnlich in dem veredelten Wert des Gegenstands, auf den seine Arbeit verwandt wurde, wiederhergestellt wird.

フランス証版では以下の通り。<sup>(87)</sup>

Quoique le premier (*l'ouvrier de manufacture*) reçoive des salaires que son maître lui *avance*, il ne lui coûte, dans le fait, *aucune dépense*: la valeur de ces salaires se retrouvant, en général, avec un profit en plus, dans l'augmentation de valeur du sujet auquel ce travail a été appliqué.

また、この箇所は『資本論』第二巻にも引用されており、そこではこう訳されている。<sup>(88)</sup>

Ogleich der *Manufakturist* (der *Manufakturarbeiter*) seinen Lohn von seinem Meister vorgeschossen erhält, kostet er diesen doch in Wirklichkeit nichts, da in der Regel der Wert dieses Lohns,

zusammen mit einem Profit, festgehalten (reserved) wird in dem vermehrten Wert des Gegenstands, auf den seine Arbeit verwandt worden.

III

「ひとりひとりの製造者」の語の意は「One who employs workmen for manufacturing: the owner of manufactory」である。「製造業主」である。この意味の用例として最初を挙げられているのは、一七五二年に出版されたD・ヒュームの『政治論集』(Political Discourses) からの「製造主は自分の使用人の労働を許してこつた」(A manufacturer reckons upon the labour of his servants) という文である。この外にも「われわれは、かれが『政治論集』に於いて『製造者』という意味で使っている次のような例を指摘する」とある。

Here are a set of manufacturers or marchants, we shall suppose, who have received returns of gold and silver for goods which they sent to Cadiz. They are thereby enabled to employ more workmen than formerly, who never dream of demanding higher wages, but are glad of employment from such good paymasters (*Writing on Economics*, ed. by Eugene Rotwein, 1955, p.38).

The workman has not the same employment from the manufacturer and merchant; though he pays the same price for everything in the market (*ibid.*, p.40).

I have been told, by a considerable manufacturer, that in the year 1740, when bread and provisions

of all kinds were very dear, his workmen not only made a shift to live, but paid debts, which they had contracted in former years, that were much more favourable and abundant (*ibid.*, p. 85, n.).

The manufacturer who employs him [=the weaver], will not give him more: Neither can he, because the merchant, who exports the cloth, cannot raise its price, being limited by the price which it yields in foreign markets (*ibid.*, p. 87).

これらの引用文中の《manufacturer》は「一読して明らかでない」雇用主たる「製造業主」を意味している。だが  
マリーヤは、この『政治論集』のなかで、《manufacturer》という語を常にこの意味で使用しているわけではなく。例  
えは――

The bulk of every state may be divided into *husbandmen* and *manufacturers*. The former are employed in the culture of the land; the latter work up the materials furnished by the former, into all the commodities which are necessary or ornamental to human life (*ibid.*, p. 5).

この場合の《manufacturer》は「農業従事者」(husbandman) とはならず「製造業（＝工業）従事者」を意味する。つまり「製造業主」と「製造工」が区別されることなげ、《manufacturer》という同じ名称のものと一括されるのではない。

それと、この文を判定してこの用例も見られる。

Exorbitant taxes, like extreme necessity, destroy industry, by producing despair; and even before they reach this pitch, they raise the wages of the labourer and manufacturer, and heighten the price of all commodities (*ibid.*, p. 85, n.).

ここに出てくる『*manufacturer*』は、「労働者」と並列され、その「賃金」が云々されている点に着目すれば「製造工」を意味すると読めるし、この場合の「賃金」は厳密な経済学的カテゴリーではなく「利潤」をも含む多義的で包括的な概念であると考えれば、この『*manufacturer*』は「労働者」を雇う「製造業主」であるという解釈も成り立たなくはないように思われる。

ともかく、以上の用例から判るように、既にアダム・スミスの時代に、『*manufacturer*』は、「製造工」の外に——*ジョンソンの『英語辞典』*には載っていないけれども——「製造業主」ないし「製造業者」という意味をもっていたのである。とすれば、スミスは後者の意味でこの語を用いることはなかったのであろうか。われわれは次にこの点を確かめなければならぬ。

結論を先取りして言えば、『*国富論*』のなかにも、『*manufacturer*』が「製造業者」という意味で使用されている例を見出すことができる。

(1) 第四篇第五章に付された「穀物貿易および穀物法に関する余論」から。

The manufacturer, however, though he had been allowed to keep a shop, and to sell his own goods by retail, could not have undersold the common shopkeeper. Whatever part of his capital he might have placed in his shop, he must have withdrawn it from his manufacture. In order to carry on his business on a level with that of other people, as he must have had the profit of a manufacturer on the one part, so he must have had that of a shopkeeper upon the other.

引用文中およびこの文章の前後に出づる『*manufacturer*』は、竹内訳以外のどの邦訳においても、「製造業者」と訳されている。妥当な訳語であると思うが、ただ私としては、スミスはここで『*manufacturer*』を、「雇用主」というよ

りも「資本の所有者」という側面で扱っていることに注意を促しておきたい。

(2) 第二篇第一章から。スミスは、社会の流動資本は四つの部分から成ると述べ、その第三と第四の部分を次のように説明している。

Thirdly, of the materials, whether altogether rude, or more or less manufactured, of cloaths, furniture, and building, which are not yet made up into any of those three shapes, but which remain in the hands of the growers, the manufacturers, the mercers and drapers, the timber-merchants, the carpenters and joiners, the brickmakers, &c.

Fourthly, and lastly, of the work which is made up and compleated, but which is still in the hands of the merchant or manufacturer, and not yet disposed of or distributed to the proper consumers, such as the finished work which we frequently find ready-made in the shops of the smith, the cabinet-maker, the goldsmith, the jeweller, the china-merchant, &c.

この二つは「*manufacturer*」も「製造者」<sup>(40)</sup>とて訳語を充てる竹内訳を除けば、他の三つはすべて「製造業者」<sup>(41)</sup>と訳している。またこの場合の「*manufacturer*」も、先の用例と同じく、「資本の所有者」として登場している点が特徴的である。後述するように、指示対象が製造業（＝工業）部門における「雇用主」であることを明確にしたいときには、スミスは必ず「*master manufacturer*」という語を使っているのである。

以上の二つとは若干ニュアンスを異にする用例も見られる。

(3) 第四篇第九章において、スミスは重農主義の学説を批判して次のように述べている。

Fourthly, farmers and country labourers can no more augment, without parsimony, the real reve-

nue, the annual produce of the land and labour of their society, than artificers, manufacturers and merchants.

この《manufacturer》を、四つの邦訳はみな「製造業者」<sup>(43)</sup>と訳している。この訳に異論があるわけではない。問題にしたいのは、それが具体的にどのような人々を指しているのだろうかといふことである。第四篇第九章にはこれ以外にも《manufacturer》が「工匠」や「商人」と並べられ、かつ「農業者と農村労働者」あるいは「土地所有者と耕作者」(proprietor and cultivator)に對置されて用いられている箇所が数多くあり、こうした用法から判断して、こういう場合の《manufacturer》は「製造業主」と「製造工」の双方を含む「製造業(＝工業)従事者」という意味で使われているように思われる。

(3) 次の引用文は、第四篇第八章末尾の有名な一節である。

It cannot be very difficult to determine who have been the contrivers of this whole mercantile system; not the consumers, we may believe, whose interest has been entirely neglected; but the producers whose interest has been so carefully attended to; and among this latter class our merchants and manufacturers have been by far the principal architects. In the mercantile regulations, which have been taken notice of in this chapter, the interest of our manufacturers has been most peculiarly attended to; and the interest, not so much of the consumers, as that of some other sets of producers, has been sacrificed to it.

この《manufacturer》を、大内・松川訳と水田訳と竹内訳は「製造業者」<sup>(43)</sup>と訳しているが、大河内監訳では何故かわるわる「大製造業者」<sup>(44)</sup>と訳してある。訳語の適否はともかくとして、問題は、ここでスミスがどのような人々を念頭に

置いて「*manufacturer*」という言葉を使っているかということである。周知のように、この「重商主義体系についての結論」の章のミスは、「商人と製造業者」こそがこの政策体系を考案した張本人であることを終始一貫して主張している。このような文脈からして、この「*manufacturer*」の中心は、「大製造業者」(*great manufacturer*)ないし「大製造業主」(*great master manufacturer*)と見てたゞ見るのが穩當なように思ふべきである。したがってこの「*manufacturer*」がさういった連中だけから成つてつたと考へるゝとすれば、それはさう早く早計である。なぜなら、ミスは同じ章の前後で次のように述べられている。

Our woollen manufacturers have been more successful than any other class of workmen, in persuading the legislature that the prosperity of the nation depended upon the the success and extension of their particular business. They have not only obtained a monopoly against the consumers by an absolute prohibition of importing woollen cloths from any foreign country; but they have likewise obtained another monopoly against the sheep farmers and growers of wool, by a similar prohibition of the exportation of live sheep and wool. The severity of many of the laws which have been enacted for the security of the revenue is very justly complained of, as imposing heavy penalties upon actions which antecedent to the statutes that declared them to be crimes, had always been understood to be innocent. But the cruellest of our revenue laws, I will venture to affirm, are mild and gentle, in comparison of some of those which the clamour of our merchants and manufacturers has extorted from the legislature, for the support of their own absurd and oppressive monopolies. Like the laws of Draco, these laws may be said to be all written in blood.



この節の最初の部分の訳は、全くまちまちである。《woollen manufacturer》を、大内・松川訳と大河内監訳は「毛織物業者」、水田訳と竹内訳は「毛織物製造業者」と訳す。また大内・松川訳と水田訳は《workman》を「職人」と訳し、他の二つはこれを特に訳さない。だが私見によれば、この文章において「ワークマン」を無視することは誤りである。そして「他のいかなる階級のワークマンよりも成功した」とされる《woollen manufacturer》は、決して毛織物業における「製造業主」ばかりでなく、かれのもとで働く「製造工」をも包含する「毛織物業従事者」を意味しているように思われる。というのは、『国富論』における「ワークマン」は、一般に「雇主」に対する「雇用労働者」を表わす語として使われているからである。それゆえ、先に引用した第八章末尾の一節には、特定の産業ではいわば「労資」が一体となって——他の生産者や消費者一般の利益を犠牲にしつつ——重商主義的政策を推進していったという意味も含まれているのではなからうか。

ともあれ、以上の考察で明らかになったように《manufacturer》という言葉の使い方はミスにあっても決して一義的ではない。というよりも、見方によっては、かれの用語法はまるで混乱しているとさえ言える。なぜなら、それぞれ別々の階級に属するはずの「製造工」と「製造業者」が、同一の語で表わされているのだから。しかしながら、一見したところ混乱ともみえこうした用語法のうちに、ある程度の規則性を見出し整理することはできないものだろうか。これが次の最終節の課題である。

#### Ⅳ

論点をはっきりさせるために、あえて二者択一的な問いを立てるとすれば、次のようになる。『国富論』に出てくる

《manufacturer》の場合、原則的に、「労働者的」側面と「資本家的」側面のいずれが基本とみなされているであろうか。どちらと答えても異論の余地がありそうに思われるが、これまたあえて答えるとすれば、私としては、前者の側面、すなわち「労働者的」側面が基本であると言わざるをえない。

その論拠の第一は、本稿の冒頭にその一部を引用した第二篇第三章の叙述で、この章においてスミスは、《manufacter》を首尾一貫して雇用労働者としての「製造工」の意味で使用している。既出のもの以外には、同篇同章から次のような用例を挙げることができる——「ところが、かれ〔＝富裕な人〕が年々貯蓄する部分は、利潤を得るために直ちに資本として用いられるので、同じ仕方では同じ期間内に消費されはするが、異なった一群の人々、すなわち労働者、製造工および工匠によって消費されるのであり、これらの人々は、自分たちが年々消費する価値を利潤とともに再生産するのである」<sup>(50)</sup>

第二の論拠は、第一篇第六章から——「原料を購入し、その所産を市場へ持って行くことができるようになるまで自分の生活を維持するのに十分な資財をもっている独立自営の製造工 (independent manufacturer) は、雇主のもとで働く職人の賃金と、その雇主が職人の所産を販売してあげる利潤との双方を利得するはずである。しかしながら、かれの全利得はふつう利潤と呼ばれており、この場合もまた賃金が利潤と混同されているのである」<sup>(51)</sup>。このような「独立自営の製造工」についての説明から、「独立自営でない製造工」、つまり「普通の製造工」は、「雇主のもとで働く職人」と同じ地位にある「雇用労働者」とみなされていたことが分る。

第一篇第十章にも、OEDに採録された用例以外に、《manufacturer》が「製造工」という意味で用いられている文例をいくつか見出すことができる——「ヨーロッパの政策は、すべての機械職人、工匠および製造工の労働を熟練労働とみなし、すべての農村労働者のそれを普通の労働とみなしている」<sup>(52)</sup>。「したがって、大部分の製造工の推定稼ぎ高が普通の

労働者の日給にほぼ等しいところでは、石工や煉瓦積み工の推定稼ぎ高は一般にこの日給の一倍半から二倍である。<sup>98)</sup>「したがってシナやインドでは、農村労働者の地位と賃金の双方が、大部分の工匠や製造工のそれらに勝っていると言われる。<sup>99)</sup>」「自由な移動が同業組合法によって妨げられているのは、工匠と製造工の労働だけであるが、定住権取得の難しさは、普通の労働の自由な移動さえをも妨げているのである。<sup>100)</sup>」

最後の論拠は、第四篇第九章の叙述、とりわけ、すでに第一節に引用した二つの箇所である。特に前者の引用文において決定的に重要だと思われるのは、農業部門の「雇用主」としての「農業者」に対応する、製造業（＝工業）部門の「雇用主」を明示的に表わすために、スミスが「master manufacturer」といふ言い方をしていふという事実である。つまりスミスは、雇用関係が問題になるときは、「労働者」としての「manufacturer」に、「資本家」としての「master manufacturer」を対置しているのである。同様の例は、外にも指摘することができる。例えば——「こうしたすべての争議にさいして、雇主のほうのはるかに長くもちこたえることができる。地主、農業者、製造業主(master manufacturer)および商人は、たとえ、ワーカーマンを一人も雇用しないでも、既に獲得した資財で一年や二年はたいてい生きてゆけるものである。<sup>101)</sup>」

他方、前節で見たように、『国富論』には「manufacturer」が——たいてい「商人」とセットになって——「資本の所有者」という意味で使用されている場合がしばしばあることも否定しえない。しかしながら、注意を要するのは、そのような場合においても、「ほとんどいっさいの労働を免れている」<sup>102)</sup>資本の所有者だけを限定的に指すような仕方での語が用いられているわけではない、という点である。「ある国民が、条約によって、全面的に輸入を禁じている特定の財貨について、ある一国だけからその輸入を許す義務を負うとか、すべての国の財貨に課している税を、ある一国の財貨にたいしては免除する義務を負うといったような場合には、その通商にこういう特惠が与えられた当の国、または少なくともそ

の国の商人と製造業者「*manufacturer*」は、この条約から必ず大きい利益を得るにちがいない。これらの商人と製造業者は、自分たちにたいしてかくも寛大なこの国で一種の独占権を享受するのである。<sup>(8)</sup>これは第四篇第六章「通商条約について」の書出しの部分であるが、ここに「商人」と並んで登場する「製造業者」は、「製造工」を——あるいは少なくとも「独立自営の製造工」を——排除するというよりも、むしろ包含するような意味で使われている、と私には思われる。

というのは、「独立自営の製造工」の類を除いた「資本の所有者」を明示しようとするさいには、スミスは、「*manu-facturer*」ではなく、やはり「*master manufacturer*」という語を原則的に使用している、と推測されるからである——「かれ（労働者（*labourer*））」の雇用主たちは、第三の階級、つまり利潤によって生活する人々の階級を構成する。……だが利潤率は、地代や賃金のように、社会の繁栄とともに上昇したり、その衰退とともに下落したりするものではない。反対に、利潤は富国では低く、貧国では高いのが自然であり、急速に破滅に向かいつつある国では常に最も高い。したがって、この第三の階級の利害と社会の一般的利害との関連は、他の二つの階級の場合のそれと同じではないのである。商人と製造業主（*master manufacturer*）は、この階級のなかで、通例最大の資本を使用し、その富によって社会的尊敬の最大部分を一身に集めている二種類の人々である。<sup>(9)</sup>「第四篇第八章に出てくる「大製造業者」とか、「大製造業主」といった表現にも、類似の意図を読み取ることができるであろう。

私が本節の初めに述べたような見解に達した理由は、以上の通りである。

## 注

(一) 『諸国民の富』岩波文庫、(一)、三三七頁。

- (2) 『国富論』△上▽(世界の大思想14) 河出書房、二八一頁。
- (3) 『国富論』中公文庫、Ⅰ、五一五—一六頁。
- (4) 『国富論』上、東京大学出版会、四一二頁。
- (5) その理由については、竹内謙二『誤訳』潮文社、一九八二年、五一—二頁を参照。
- (6) 『諸国民の富』岩波文庫、(㉑)、四六六—四七頁。
- (7) 『国富論』△下▽ (世界の大思想15) 河出書房、一二九—一三〇頁。
- (8) 『国富論』中公文庫、Ⅱ、四七七—七九頁。
- (9) 『国富論』中、東京大学出版会、三六二—六三頁。
- (10) 『諸国民の富』岩波文庫、(㉑)、四八一—八二頁。
- (11) 『国富論』△下▽、一三七—三八頁。
- (12) 『国富論』中公文庫、Ⅱ、四九三頁。
- (13) 『国富論』中、三七三頁。
- (14) 『諸国民の富』岩波文庫、(一)、二九六頁。
- (15) 『国富論』△上▽、九一頁。
- (16) 『国富論』中公文庫、Ⅰ、一七〇頁。
- (17) 『国富論』上、一四〇頁。
- (18) Stewart, J., *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, edited and with an Introduction by Andrew S. Skinner, 1966, Vol. 2, p. 694 : 696.
- (19) *Ibid.*, p. 691.
- (20) *Ibid.*, p. 693.
- (21) ステュアート／加藤一夫訳『経済学原理』第二編(上)、東京大学出版会、一九八一年、八二頁。
- (22) 同前、一〇八頁。
- (23) 同前、一一六頁。

- (24) 同前、四六頁。
- (25) フーサー・ヤング／宮崎洋訳『フランス紀行』法政大学出版局、一九八三年、六六、八〇、一五九、二二三、三二二、三一九、三二一頁。
- (26) *Human Documents of Adam Smith's Time*, by Royston Pike, 1974, p. 188.
- (27) *Ibid.*, p. 190.
- (28) *Ibid.*, p. 192.
- (29) Marx, K., *Capital*. Vol. 1, Moscow (Progress Publishers), p. 261.
- (30) *MEW*, Bd. 23, S. 290—91.
- (31) Marx, K., *Le Capital*, First Reprinting, 1967 Tokyo, p. 118.
- (32) *Capital*, Vol. 1, p. 262.
- (33) *MEW*, Bd. 23, S. 291—92.
- (34) *Le Capital*, p. 118—19.
- (35) *MEGA*®, I/3. 2, 1977, S. 442—56 を参照。
- (36) *MEW*, Bd. 23, S. 594. Ann. 4a.
- (37) *Le Capital*, p. 248. n. 3.
- (38) *MEW*, Bd. 24, S. 370.
- (39) 『諸国民の富』岩波文庫、(㉒)二〇〇頁。水田訳『国富論』△下▽、二四—五頁。『国富論』中公文庫、Ⅰ、二四—五頁。竹内訳『国富論』中、一八五頁（「製造者」）。
- (40) 竹内訳『国富論』上、三五—五二頁。
- (41) 『諸国民の富』岩波文庫、(㉒)二四三—四四頁。水田訳『国富論』△上▽、二三七—三八頁。『国富論』中公文庫、Ⅰ、四三〇—三二頁。
- (42) 『諸国民の富』岩波文庫、(㉒)四八四頁。水田訳『国富論』△下▽、一三九頁。『国富論』中公文庫、Ⅰ、四九五頁。竹内訳『国富論』中、三七五頁。

- (43) 『諸国民の富』岩波文庫、(三)、四五八頁。水田訳『国富論』△下V、三七七頁。竹内訳『国富論』中、三五六一五七頁。
- (44) 『国富論』中公文庫、Ⅰ、四六七—六八頁。
- (45) 『諸国民の富』岩波文庫、(三)、四二二頁。水田訳『国富論』△下V、三六五頁。『国富論』中公文庫、Ⅰ、四三六。竹内訳『国富論』中、三三三頁(「大手製造業者」)。
- (46) 『諸国民の富』岩波文庫、(三)、四二三頁(「大きな親方製造業者」)。水田訳、同前(「おおきな親方製造業者」)。『国富論』中公文庫、Ⅰ、四三七頁(「大製造業者」)。竹内訳『国富論』中、三三四頁(「大手製造家」)。
- (47) 『諸国民の富』岩波文庫、(三)、四三〇頁。『国富論』中公文庫、Ⅰ、四四三頁。
- (48) 水田訳『国富論』△下V、三六八頁。竹内訳『国富論』中、三三八頁。
- (49) 『国富論』における「ワークマン」という語の意味については、拙稿「十七世紀イギリスにおける使用人と労働者——マクファーンソンのロック解釈をめぐって——」、『法経研究』(静岡大学)三二巻三号(一九八三年一月)、二七七—七八頁を参照。
- (50) 『諸国民の富』岩波文庫、(三)、三五二頁。これ以後、参照箇所を表示は、最も広く利用されていると思われる大内・松川訳(岩波文庫版)の巻数と頁数だけを記す。但し、訳文は修正してある。
- (51) (一)、一九九頁。
- (52) 同前、二九五頁。
- (53) 同前、二九九頁。
- (54) 同前、三四九頁。
- (55) 同前、三六五頁。
- (56) 同前、二二四頁。
- (57) 同前、一八八頁。
- (58) (三)、二二六頁。
- (59) (一)、二一九頁。